

が見える

石田郁男

葬儀に取材した一連中の作。死者の魂が旅立って行く幻想であるけれど、「パッサージュ際の岸辺」を「魂がトランク提げて行く」イメージが独特。道行き文の伝統に沿いつつ、いかにもフランス風である。リヨン在住の作者ならではの空気が作品に流れている。

金縷梅きんろうばいや山茱萸さんしゅゆの淡き色でなく連翹色のセーターを
買う 深澤一女

外国語と比べると、日本語の色彩名は具体的な物(植物(さくら色)、動物(きつね色)、鉱物名(金色)など)もろもろの物たち)の名が圧倒的に多い。ここでは三種の植物名を出してそれぞれの花の色を読者に想像させている。日本語のベーシックな部分に触れる楽しさ。

余談だが、抽象的な色彩名を見分けるには、後ろに「い」をつけてみると分かりやすい。「青」「赤」など後に「い」がつくのは抽象的な色彩名。「桜」「狐」「金」等、具体的な物名をベースにした色名は「い」がつかない。「桜色」「狐色」とは言うが「桜い」「狐い」とは言わない。「黄」「緑」など例外もあるが、おおよそのところはこれで分かる。

標的へ急降下する瞬間のまま第二理科室に冷えゆく
翼 清水あかね

鷹とか鳶とか、猛禽類の剥製だろう。急降下の姿のまま固定されて、理科室にすっと置かれている不思議。「第二理科室」「冷え行く」が表現面でのポイント。

黒板を黒に戻してカラフルな「卒業おめでとう！」
だった粉 塩野ゆり子

結句「……だった粉」という止め方の意外性が勝負どころ。余熟というより、「えっ!？」という笑いか。卒業式が終わった後の教室である。黒板を消したのはたぶん作者だろう。「黒に戻して」に表現的な工夫を読む。

深ぶかか続くうさぎの雪の跡 月かげ蒼く入れて凝れる 加賀谷実

積もった雪、兎の足跡、月光、とちよつと道具立てが揃いすぎた感もあるが、童話的な雰囲気がいい。

転んだら転びつばなしのわが心ダイケアバスを今日も見送る 大平真理子

ダイケアバスを見送ってから何時間かが、やっとほつとできる時間。自分の心を自分でコントロールできない日々。介護生活のなかの実感だろう。

鉄臭い工場裏の路地に差す十四、五分の二月の夕日 谷岡亜紀

昭和の下町に題材をとった劇画の一シーンのような作。下旬の二種の数詞も劇画的具體性を補強していると見ていいだろう。

左利きの竹山妙子その夫の歌の清書に励みたまいき 河野千絵

過日逝去された竹山広夫人・妙子さんへの挽歌。作者はかつて長崎に在住、竹山夫妻と昵懇だった様子がうかがわれる今月の一連。いい追悼歌だった。